

ami-san no * KIMONO *

アミサン/キモ/

あみさんのきものはじめ

～ ハジメ ～

桃色の着物

「女つてのはひとたび妻になっちまうと女を忘れちまう。それで子供ができると今度は母ちゃんになる。母ちゃんのうちはいいが、おばちゃんになつたらもう女を忘れたというよりは女じゃなくてオバちゃんっていう生き物になっちまうような気がするんだよな。」

だから結婚するオネエチャン達はいつまでも妻、女つてのを忘れないでいて欲しいと思うなあ俺は……」

出産退職する頃に現場の職人さんから聞いた言葉

二人の子供を寝かせて居間に戻ると飯台のお皿が私を待っている。

「いつまでもいつまでもやる事があつて……私もタイムカード押したいわ」
すると何処からか声がする。

「何てだらしない、あれは女のできそこないだ……」

私はしかめっ面をさらに歪めて、ただ黙々と動き回っていた。

ほんの三年前、仕事に打ち込んでいた頃は自分の胸の中に華を感じない時はなかった。

徹夜で図面を納めるような仕事は、苦勞と言えば苦勞だった。でも、あの頃のそれは、私を

成長させてくれた。何よりも、やっていて楽しかった。

しかし、今の苦勞は何か違う。私をただ萎れさせ、ひたすら眉間に醜い皺を刻ませてゆくだけのよう気がする。

「……でもまあ何だ、華も花ももういいや。いいの」

あの頃の私は育児に疲れ、夫に愛情がわかなかった。私は兎にも角にも萎れていた。寒さが元で風邪をひき、氣力ごと根こそぎ枯れ果てる〈私の冬の恒例行事〉が今年もやってきた。しかも、今年のそれはひどく重症のようである。

信州の冬は大層寒く、この地には「シミル」という方言がある。凍るように冷えるとしても地方の築三十年の借家。そこでの夜の授乳は、超寒がりの私には余りに過酷だった。寒いのは夜だけではない。昼間もだ。もうあんまり寒いので、デニムスカートの下にスパッツ代わりの安物裏起毛ジャージを履いた。もう恥も外聞も無くなっていた。

ただでさえ安物の服を毛羽立ち終わるまで着続けている自分に気が付かなかったのだが、今日、ふとその自分を鏡で見て、愕然とした。

「……終わってる」

貧乏神を背負っているような、何とも辛氣臭いというか、我ながら近づきたくない女がそこに居たのである。

「終わってるう」

若い頃ああはなりたくないと思った主婦って、まさにこんな感じじゃなかったか。

い、いや、でも、これが女の幸せだと、おばあちゃんに言われたんだろう！　しっかりしろ自分！

「ん？　おばあちゃん……」

私はふと思い立ち、桐箆笥の中の着物を引っぱり出した。

「寒くなったら毛糸の腰巻き！　そうよ、着物があつたつけ！」

手に取ったのは桃色の縞の、洗える着物だった。

この着物、私が働いていた時、給料取りだから作ってあげるよと母に二枚プレゼントした着物のうちの一枚の方だ。お店の間口の端っこにワゴンがあつて、そこに積まれた化繊の反物は仕立てて一万三千八百円と書かれていた。

「十何万円の着物はプレゼントはできないけど、これを二枚つくってあげるね」

母は大層喜んだ。そして二人で着られるようにと、私の寸法で作ってくれた。

そうして、一枚は青色の麻の葉を選んだ。なかなか決まらなかった二枚目は、一緒に買い物に行った私の弟が選んだ。お洒落さんな弟も、お母さんっていうのはこういうイメージなのかしらと母と笑った、優しい桃色のこの縞の着物だ。



会計の時、店員さんは電卓を叩きながら何故かもう一回かけ算をして、五万五千二百円ですねとこちらに向けた。

私がびつくりしていると他の店員さんが慌ててこっちに駆けてきた。その女はあらごめんなさいといつまでも笑っていたけれども、私はそんなに面白くなかったな。

一か月後、受け取りに行った時、チーフの人はその着物を箱に入れて丁寧に渡してくれた。私が初めて母にプレゼントした着物だ。

それから何年かが過ぎ、私は結婚する事になった。母が、ささやかな嫁入り支度として箆笥に着物を幾らか入れてくれた時、母は桃色の着物を私に着なさいと持たせた。

私は、こういう色目は趣味でなかったが、とりあえず貰っておいた。上手の仕立ての人に当たったこの着物は、とても着やすかったのだ。

桃色の縞に袖を通した。可愛い地色は三十路の私にはちよつと気恥ずかしかった。

けれど着物姿の自分を鏡に映すと、

胸の中に「ぼっ」と花が咲いたような気持ちになった。

「……疲れてカスカス。もう何んにも出てこない……」

そう思っていたのに、思わず、につこりしてしまった。

そんな事をやっていた丁度その時だ。

「おい。あがるよー」

両親が孫娘を見にやって来た。

（何もやましい事をしていた訳ではないのだ
が）本気で慌てた。

私はかなり照れながら、着物のままで玄関へと
向った。

すると両親は「おやまあ、今日はまた何で着物
なんか着て」

と、少し驚いて、でもとても喜んで、よく似合うよと私の着物姿を誉めてくれた。

そして、母は自分の割烹着を外すと、私に付けなさいと言った。

割烹着姿になった私を見て、

「これで奥さんになった。脱がずに夕飯の支度をしなさい」

そう言って、微笑んだ。

S

S

その日の晩。帰宅して私を見た夫は……とりあえずびっくりしたらしい。

「お義母さんが居るのかと思ったよ」

夫は笑いながら、着替え始めた。

「なんか、焼酎のCMをやってるような気がするわ」



私はくすくす笑いながら徳利を飯台に置いた。

「いいもんだねえ、自分の女房が和服つてのは」

夫は何処かそわそわ落ち着きがない。

「お疲れさま。おひとつ、いかが？」

お酌をしようとすると

「あつ、どうも」

そんな様子がとてもおかしく、嬉しかった。

いらないうて言ってるのに、母が簞笥に入れた、桃色の着物は

〈心に花を咲かせなさい、笑顔でいなさい〉

そんな、母の想いだったのかもしれない。

きもの始め

いつも着物の祖母や母を見ていた私にとって、毎日のきもの暮らしは実に簡単な事だった。しかしだ、いざ「自分」がいつも着物の女をやってみると外に出歩く時はさすがに照れた。着物、と言っても〈服〉を着ている事にならないのだけれど、やっぱり照れた。

でもそう感じたのは大体三日くらいだ。

「え、あの人着物着てるよ↓あの人また着物着てる↓そうか、あの人を着物なのね」慣れつてのは自分だけじゃないのね、それが最初の発見だったような気がする。

そういう私も、短い間ながらも本心着物の自分に慣れるまでには苦労した。

私は生活する着物なの！　と言いながら、そこはそれおキモノだ……と思いつつも、私は引き続きおんぶに抱っこ、車の運転、炊事に洗濯お買い物をし、子供達の食べカスを拾ってはいずり回り、添い寝をしてゴロゴロ転がっていた。

「生活する着物だから……だから何だったんだろう？」

気が付くと、今までの漠然とした〈着物〉に対する思い込みとは何だったのかさえ思い出せなくなつた。

何週間か経つと、昨日も着物だったから今日も着物、そんな感じになつてきた。

一か月ほど経つた頃だったか、実家に立ち寄つた時、両親に、やっと着物が馴染んできたね、

と言われた。そう言われるまで、この日の私は着物を着ている事自体忘れていた。

春には一目でわかる新入社員や学生さんが、皐月の頃になるといつぱしの雰囲気になると似ているかもしれない。

やつと着物が馴染んできた、それは嬉しい言葉でもあり、寂しい言葉でもあった。

着物を着始めた頃は恥ずかしかった。初心者まる出しに見えているのかと思うと、とにかく恥ずかしかった……一方で、私はそんな自分を楽しんでしまったのだった。

育児の真っ只中だと女を忘れる。忘れたくないけれど後回し（哀しいのはこっちの方だ）。

でも、着物始めの一步で湧いてくる嬉しき、そして恥ずかしき……そんな嬉し恥ずかしの仕草は当の本人が知らず知らずのうちに女の色香を漂わせているらしいのだ。

しかも着物に着られている風の拙くも微笑ましいそれは、価値の高い色香であるという。たとえそれが見馴れきった女房のそれでも、だ。

三千九百円の化繊着物を着ているだけなのに、早く子供達を寝かせろと言われる。そんな盛り上がり様は、振り返るとまるでもう一度惚れてもらったかのようなようだった。

もし着物始めの方が私とすれ違つて、私が笑みを浮かべてチラチラ見ても、どうかお許し頂きたい。抱きしめたいほど愛くるしい風情は本当に素敵なのだ。いわゆる慣れや上級テクでは絶対に出せない本音の恥じらい。これは着物にとって本来最も似合う魅力だと思う。

きものの神様ははじめの一步を踏み出す者に宝物を持たせてくださるのではないだろうか。

さて、着物を探してみよう

ああもう大変と嘆くより今できる事をしよう。よし、決まりだ。

すっかりその気になった私だが、桃色の着物の洗い替えが袴や丈の足りない母のお古じゃ寂しいと思った。そんな訳で自分の丈の着物を買ってみようかなと思い立った。

今までそういう気にならなかったのは、私でも買える着物、化繊の着物にどうも触手が伸びなかったからだった。まだ私が十代の頃ぐらいい見た化繊の着物は、興ざめな類のコシがあったように覚えている。そしてこんなの着ていたら浮いてしょうがないと思える色柄。祖母や母が普段に着ている着物とは雰囲気有余りに違っていて、私にはどうにもダメだったのだ。

しかし母は上手く見つけたなと思える化繊の着物も持っていた。だからちよつと本気を出して探せば見つかるんだろうな実は、と思い、そんな軽い気持ちで、近所のお店を覗いてみた。

洗える着物コーナーには、仕立て上がりで化繊の着物が吊されていた。

昔々に化繊の着物とその色柄を見て、別な意味で感嘆した頃から時は流れたのだろうか。結



構いいないと思いがち、私は着物を見ていた。でも、気に入った色柄は見つけられなかった。しかし、あるところから選ぶしか手に入れる手段は無いのだ。私はちよこちよこ足をのびし、いくつかのお店を見てまわった。でもやがて私はお店を覗く事をしなくなった。

「好みの着物が無い無いと言いがち、ある訳ないとも思うものなあ」

諦めかけた丁度その頃、インターネットでも洗える着物が販売されているのを知った。ネットが一番のお気に入りになったお店は、好みの着物と値札のものばかりだった。

私は大喜びでそこにあつた深い緑色の地色に雪輪が配されている化繊の着物を買った。

それを着て実家に寄った所、父や母には、「また地味な色の着物を買ったものだ」と言われたが、「シックと言つて欲しいわ」と言い返した。

初めて満足した化繊のお対。あのお店のご店主はおそらく敢えて化繊を提供していると思われる。あの色柄、粋で洒脱なあの感覚は、正絹を普段着にしていた洒落者の着物のそれだ。

祖母の大事にしていた着物は実に粋だった。色柄は深く単純だったが、糸が違った。それが粋なのだ。じゃあ糸・素材の質を落とすとうなるか。ただの地味な着物になる。

さり気ないのに魅せる、粋。その根元的な条件をこの感性を持つご店主がご存じでないはずがない。そこを敢えてやった、それはひとえに若い世代に贈る為の潔さだったと、私は思う。やることが粋だから、並ぶ着物も粋だ。そんなお店に出逢えて、とても嬉しかった。

ウールのきもの



和服生活を始めて、化繊の着物を何枚か手に入れた。自分の衿、丈の着物を新しく着る事ができるのは嬉しく、私はとてもご機嫌だった。

しかし私はまた着物探しを始めた。信州の冬は寒い。私はもつと暖かい着物を知っていたのである。それがウールの着物だ。冬季はどうしてもそれが欲しかった。

祖母、母の普段使いの着物はほとんどがウールだった。そして私が幼い頃に着ていたのもウールのお対だった。そんな、私にとつては一番馴染みの深かったウールの着物は平成十二年冬、私が探した範囲では見つける事もできなかった。

お古ならドサドサ出てくるように、昔は広く愛好されたウールの着物。それは暖かく、コシがあつてとても着やすい。耐久力にすぐれ、母のお古でも膝が抜けていない。

愛好されてゆくに充分な性能があつたと私は思う。それが何故こうもお目にかかることが出来なくなつたのだろう。それが時代と言つてしまえばそれまで、なのだけれども。

しかしだ、欲しい家族が現にココに居続けたのに、たとえ一匹でも出逢わせてくれなかったこの憂き世。私は心底恨めしく思ってた。

きもの暮らしを始めて、私はお店で、「ウールの着物が欲しいんです」と尋ねた。でも、

「いやあ、今はもう無いですねえ……」といった生返事だった。

後日、お店の方が〈着物を作りませんか〉と家の玄関までお越しになった。

「二本あれば一か月食えるマグロみたいな着物ばかり売ってんじゃないよっ」正直に言えればどれだけすつきりしたかと思う。

私は諦めて母の三十年前のウールの衤出しに挑戦した。母の普段使いの洋服を直して着るなんて事は考えられない。やはりもう和服生活をする時代ではないのだと、とても寂しく思った。

そんな頃、インターネットの呉服屋さんにウールのお対が売りに出されているのを見つけた。それは黒地に赤い緋の飛び柄で、私は、本当はもつと単純な柄が良かったが、私が探し当てる事ができた唯一のウールだったので私は真剣に考えた。

それは仕立てたまま訳あって引き取り手の無くなってしまったものだった。衤は一寸短かったがそんな事にはもう慣れっこだ。とにかく新品が着たかった。

しかしお値段はかなり良かった。私が今、勤め人であったのなら、間違いなくスーツを買った方がよいと思うだろう。でも今の私に必要なのは着物なんだ、三十年着るからいいんだと、思い切って買った。

届いたウールの着物は当然ながら新品である。母のお古しか知らない私は本当に嬉しかった。

着てみると、実に普段着らしい雰囲気になった。

スーパーで買い物などをしていると、小紋風に作られている化繊の着物を着ていた時はぎよつとされたり、「いいわねえ、動かなくてもいい人は…」と意味ありげな事を言われ、きもの暮らしを始めた頃は、着物を着る事にげんなりしてしまいそうになった。でも、ウールの着物っていうのは、普段着の着物という記憶が市井の中にもまだ残っているらしい。

今はもうウールの着物の方が化繊の吊しより高いというのに、化繊の着物の時に心ないリアクションをする人が何故か納得してくださる。さらに、年輩の方々に大変暖かな眼差しを頂戴するのだ。そして実際純毛だから着ている本人もホントにあつたかい訳で、私の冬の着物暮らしはとても快適になった。

嬉しき余つてウールの新品を着て私の両親に見せに行つた時は、

「懐かしいわねえ。昔はみんな着ていたわよねえ、こういう柄のウール」そう言って、本当に懐かしがつていた。

ママの必需品



私の祖母はいつも前掛けをしていた。母は常に割烹着を愛用している。そんな訳で、私の日常着物の記憶と言えば〈何か付けている着物姿〉である。着物は大きいので洗うのが大変。前掛けや割烹着は必須アイテムなのだ。

祖母や母と同じ和服生活を始める事にした私にとって、前掛けや割烹着探しは、着物と同じくらい、もしくはそれ以上に重要な事だった。

年齢層の広い洋品店には、時が止まったままのような、フリルのついた白いエプロンが売られている。昔、現皇后様がスカートに白いエプロン姿で宮様とおままごをなさっていた写真を見た事があった。そして市井のお母さん達もそうだった。つけてみると、何故か



優しい気持ちになれる。私は、あの時代の雰囲気、何とも言えない懐かしさを感じる。さすがの私も今時洋服にはつけないが、着物だとできるので嬉しい。

そんな風に、好きだとOKの一方、割烹着については、どうも現行のそれを買う気にならなかった。私はサザエさんの漫画で見かけるような、フリルのついていない長い丈の割烹着をつけたかったのだ。

そんな気持ちをインターネットで発信し続けていると、とある呉服屋さんがフリル付でだが、長丈の割烹着を紹介してくれた。

私は上機嫌でそれを付けていた。そうしたら母に「……変よ」と言われた。

「あのねえ母さん、自分の時代の感覚が正しいみたいな認識は良くないよ」

「正しいなんて言っていない。長いのは変だって言うてるだけよ」

「今の私達世代には、長い方が人気あるのよ。かわいいじゃん、長いのがって」

「格好悪い。割烹着はこの丈よ」



母に続き、父が言つた。

「そうだよ。あんまり長いとなあ」

私は父を思いつきり睨んだ。

「でも、昔は長かったんだよ割烹着つて。それでも
お前の格好を見ると、昔の看護婦さんを思い出す
なあ」

さすが父。実に上手いまとめ方だ。でもそんな事で私と母の口論は止まらない。

「フリルは余計よ。何でこんなもの付けたのかしら」

「無い方が変よ」

「変って何、変って！」

たかが割烹着でこの騒ぎである。

ある日、息子を保育園に送っていった朝の事だ。私を見て、一人の子がママに話しかけていた。

「あのお母さんエプロン付けたままだよ？」

ママは慌てて通り過ぎて行つた。